

紀 要

第 22 号

2009.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

【近江の横穴式石室実測調査報告2】

野洲市南桜8・9号墳実測調査報告

重田 勉

1. はじめに

野洲市南桜地先に所在する塚岩古墳群の範囲内において竹長川補助通常砂防工事が計画され、それに伴い平成20年度に試掘調査が実施された。試掘調査は滋賀県教育委員会が調査主体となり、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施され、重田が調査を担当した。

試掘調査では確実な古墳を確認するにはいたらなかった。しかし、調査地周辺の遺跡分布状況の確認を目的として周辺の踏査を実施したところ、塚岩古墳群に隣接する南桜古墳群内において実測による資料化が可能な石室2基の存在を知りえた。それに加えて、古墳の可能性のある地点1箇所を新規に見いだすことができた。そこで、今回は実測可能な石室2基を対象として実測調査を実施した。

本稿はこの実測調査の結果を報告するとともに、あわせて新規に確認した古墳について報告することを目的とする。

2. 南桜古墳群について（図1・2）

従来の認識 南桜古墳群は野洲市南桜地先に所在する古墳群である。『野洲町内遺跡分布調査報告』⁽¹⁾によると円墳15基が確認されている。しかし、南桜古墳群に関しては、いままで正式な発掘調査が実施されたことがなく、その様相が明らかになっているとはいえない。

支群 古墳群は南桜集落の南東にひろがる丘陵地帯に分布する。その分布状況は東南から北西へ向けてのびる支尾根群の稜線付近に1～3基程度の円墳からなるグループが点在するといえよう。ここでは『分布調査報告』での支群分けを参考に、A支群（1号墳）・B支群（2～4号墳）・支群（5～7号墳）・D支群（8・15・16号墳）・E支群（9号墳）・F支群（10・11号墳）・G支群（12～14号墳）の七つの支群に分けておくことにする。

報告の対象 今回報告するのはD支群中の8号墳と16号墳、E支群の9号墳である。なお、16号墳は今回の踏査によってあらたに見いだした古墳である。以下、支群を単位として8・16・9号墳の順に報告を進めていきたい。

3. 南桜8号墳（図3）

位置 8号墳はD支群のなかでも丘陵の高位側に立地しており、標高約150mを測る。現在、古墳のすぐ西側には名神高速道路が走っており、古墳からは高速道路上を走行する車両を間近に視認できる。

墳丘 墳丘は流失しており、現状では確認できない。

石室 南側に開口する横穴式石室である⁽²⁾。現状では

玄室北半部が遺存するのみで、玄室南半部および羨道部は失われており、袖構造等の詳細を知りえない。さらに、玄室北半部も側壁2段分程度の遺存にとどまり、それ以上の上部構造を明らかにできない。

玄室の各部法量は奥壁幅約2.6m・奥壁高約1.5m以上、右側壁長2.5m以上・左側壁3.3m以上である。石室主軸はN-15°-Eであり、ほぼ南北方向とみてよい。

玄室内には大小の石材がみとめられる。玄室北半部の石材は扁平な直方体であり、大きさからみて側壁石材と似通っていることから、側壁石材が落下したものと考えられる。一方、南側には大ぶりの石材（長軸約3.3m・短軸約1.7m）1石がみとめられる。大きさから見て、これは天井石であったと考えられる。

奥壁は扁平な直方体の石材を積み上げている。その積み方は長軸を水平方向において積み上げる（ヨコ使い）もので、現状では目地通りから5段分の積み上げが確認できる。目地通りが上下する部分も一部にあるけれども、比較的整った印象を受ける。

右側壁については、現状での底面のラインが奥壁から約1.2m以南が大きく玄室の内側へ屈曲しており、この部分に関しては原型を保っているとは考えがたい。現状では3段分の積み上げが確認できる。奥壁と同じく扁平な直方体の石材をヨコ使いすることで積み上げている。

左側壁で3段分の積み上げを確認した。奥壁および右側壁と同様に、石材の大半は扁平な直方体の石材をヨコ使いによって積み上げることを基本とする。ただし、2・3段目の奥壁よりの1石はタテ使いによる。

小結 以上が8号墳の実測調査結果である。遺存状態による制約のために詳細を知りえないのは残念であるけれども、①使用石材が比較的小ぶりであることに加えて、②壁面石材の配石方法としてヨコ使いが主体的であることは、古相を示す要素として評価することができよう。所属時期については、おおむね6世紀後半頃を想定しておきたい。

4. 南桜16号墳（図3）

概要 先述したとおり、16号墳は今回の踏査で石室石材と思われる石材の露出を確認したことから古墳の可能性が高いと判断したものである。『分布調査報告』には記載がみられないので、16号墳として仮番号を付けて報告する。

位置 16号墳は8号墳の南側に位置する。巨視的にみて8号墳とは同じ尾根筋にあるといえるけれども、微細にみると両者の間には小支谷が入り込んでいる。立地点の標

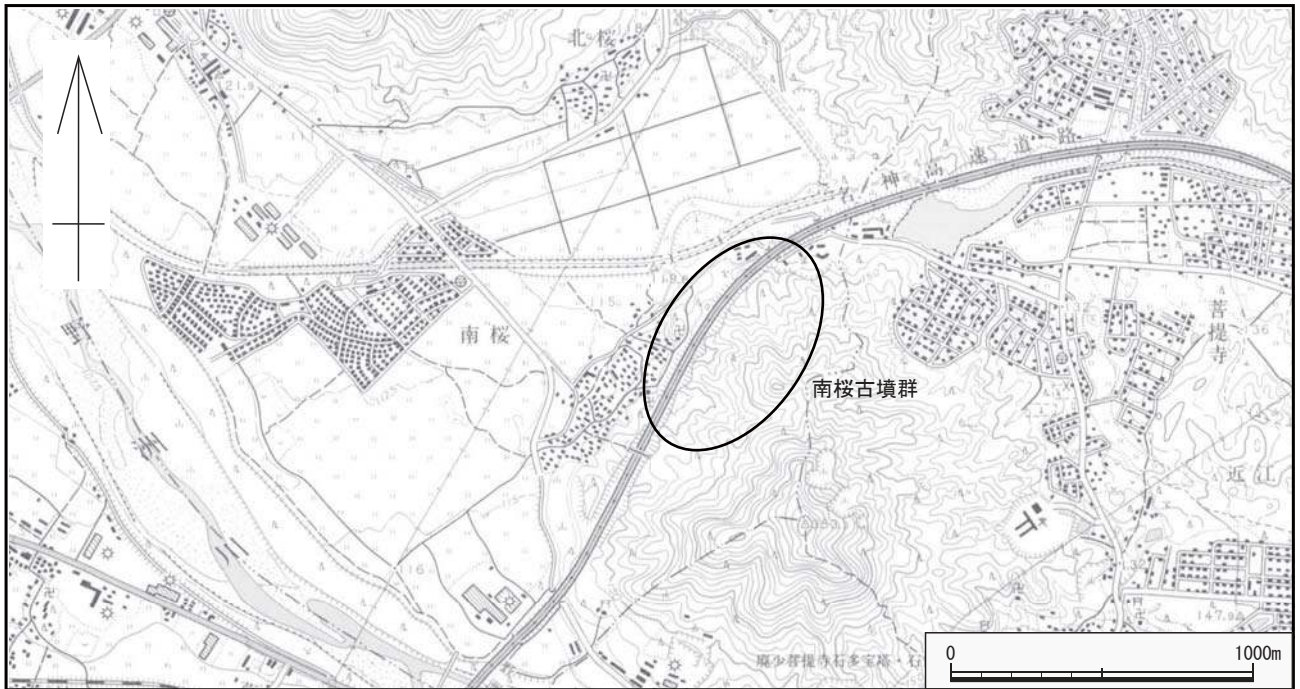


図1 南桜古墳群位置図(S=1/25,000)

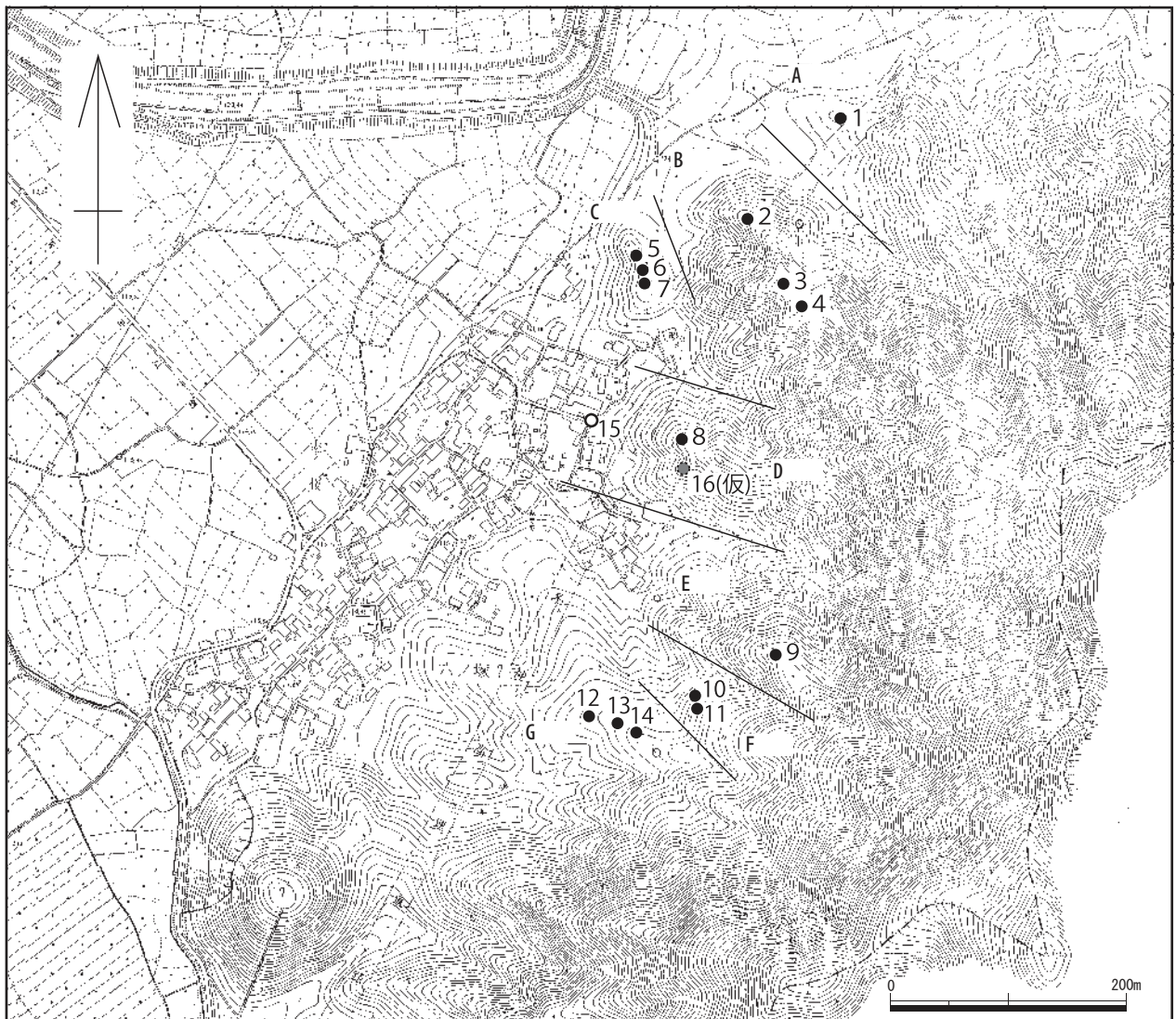
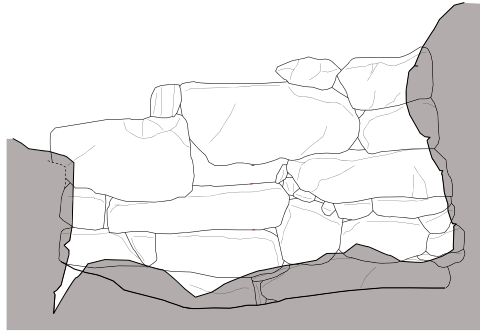


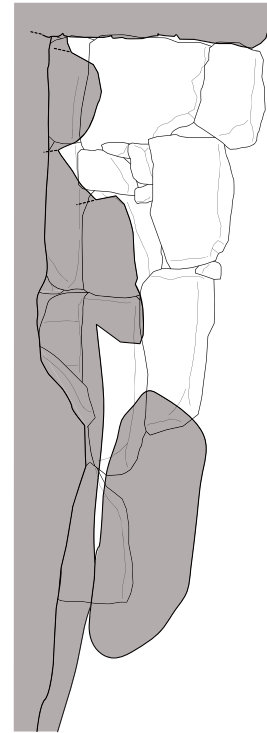
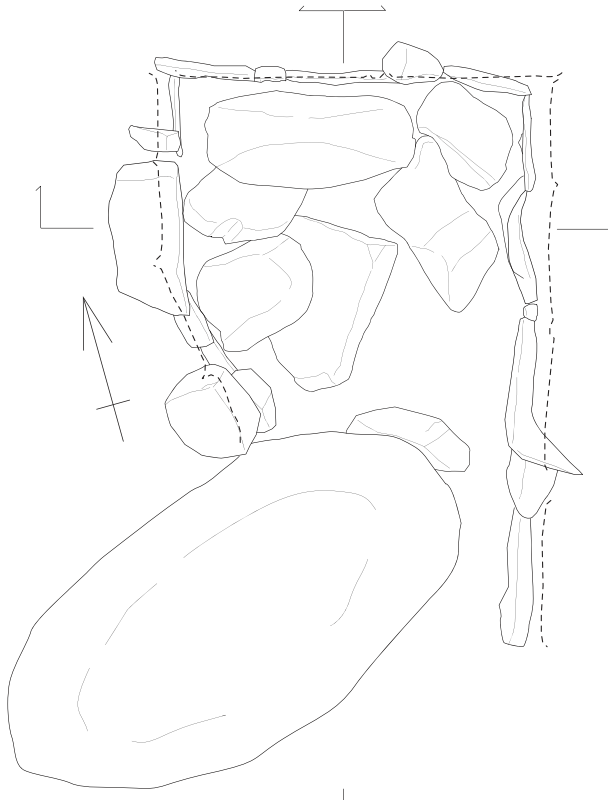
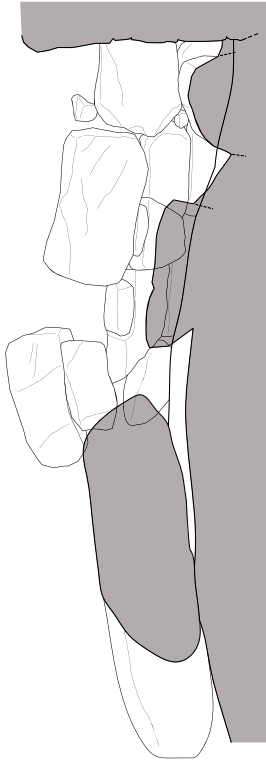
図2 南桜古墳群の位置と分布(拠註1文献)



①8号墳遺存状況（南から）



②8号墳遺存状況（北から）



0 5m
S=1/50

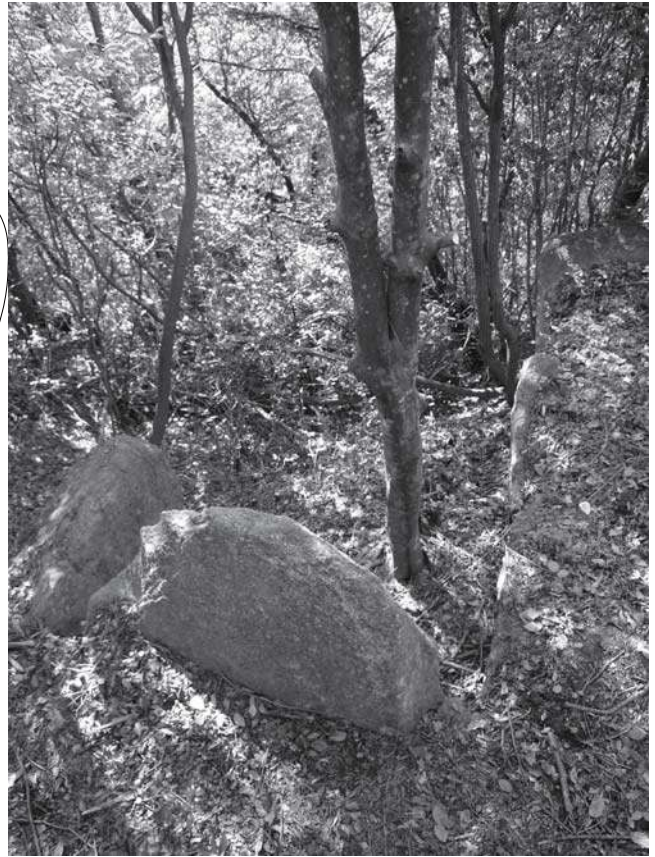
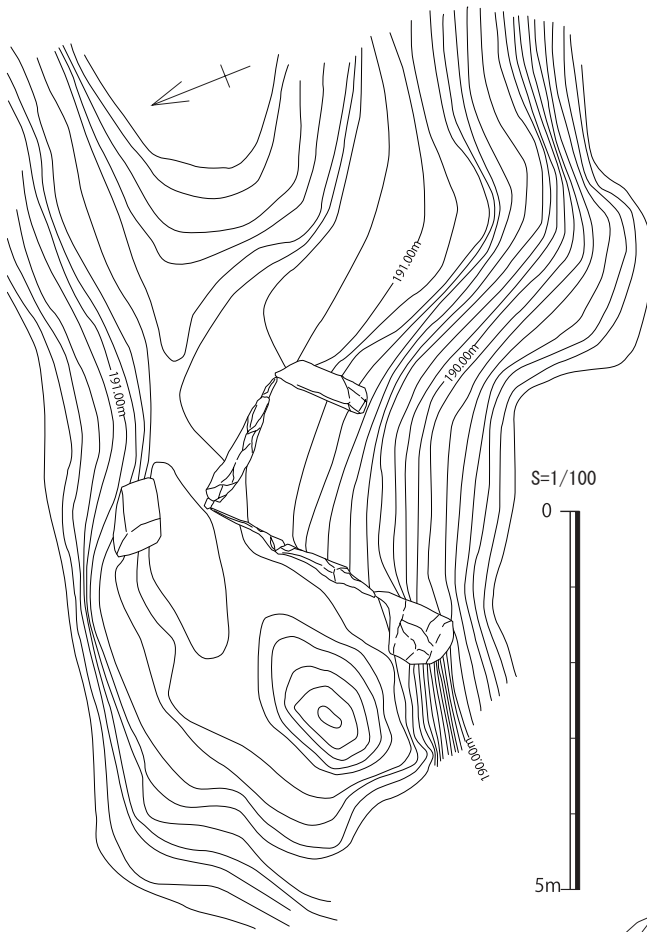


③16号墳遺存状況（南から）



④16号墳遺存状況（西から）

図3 南桜8号墳石室実測図および関連写真(①・②)・16号墳関連写真(③・④)



9号墳遺存状況(北から)

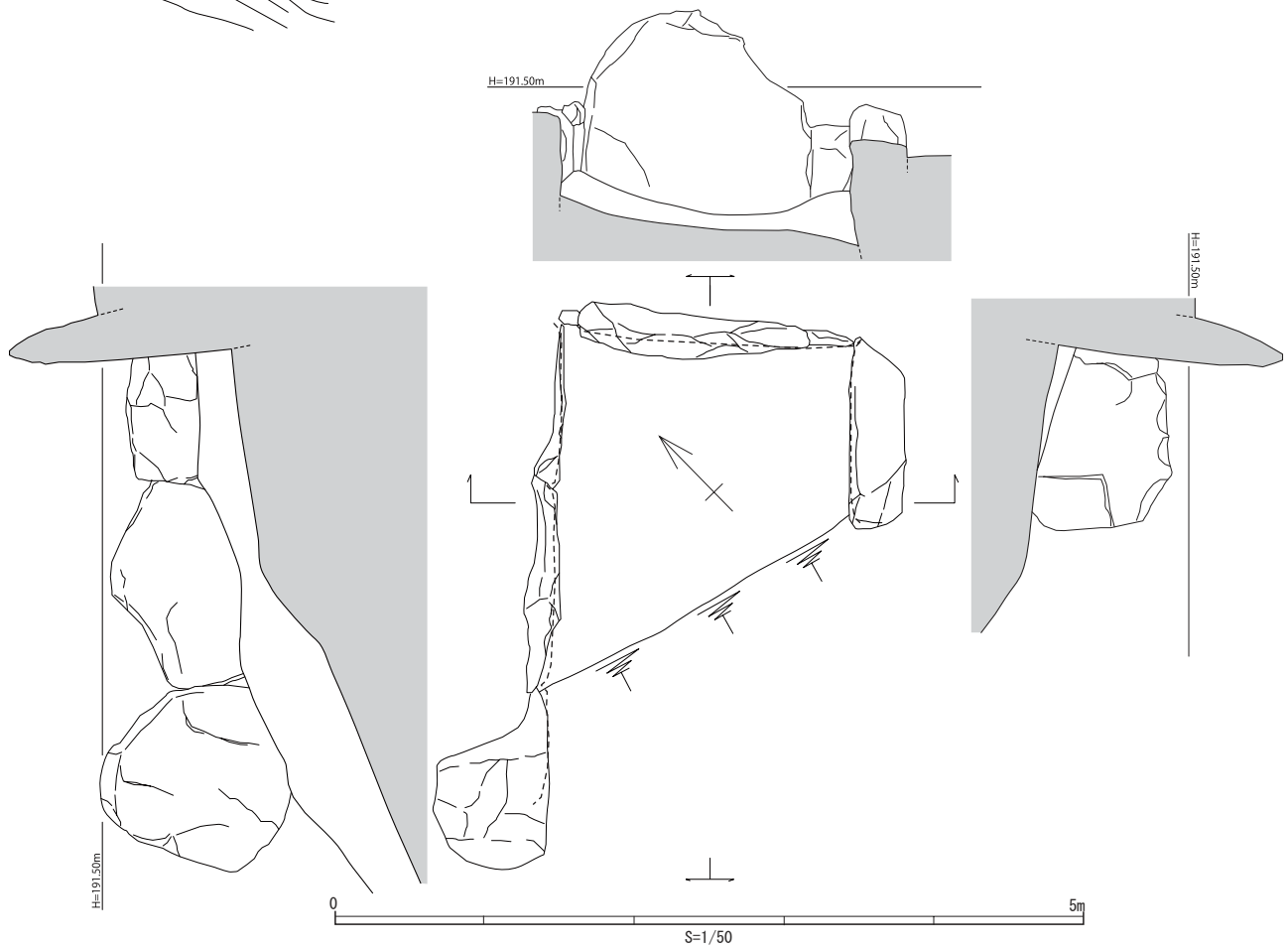


図4 南桜9号墳周辺地形実測図・石室実測図・関連写真

高は約145mである。

墳丘 明確な墳丘は現状で確認できない。石室南側は急峻な斜面となっている。これについては、8号墳の事例などから見て、稜線斜面が流失した可能性が高く、古墳築造時は現在よりも幅が広い尾根であったと考えられる。

石室 稜線上において平らな面を西側に向けた石材が南北方向に並んでいる状況がみとめられた(図2-③・④)。その石列の西側は斜面となっており、その下方には8号墳の天井石とほぼ同規模の板状石材が落下している状態を確認できた。これらから判断して、ほとんど原形は留めていないけれども、横穴式石室の存在を想定した。

5. 南桜9号墳(図4)

位置 D支群の南東側の丘陵稜線上に位置する。D支群とは谷を隔てている。E支群は9号墳のみからなり、現状では同一稜線上に古墳を確認していない。標高は約190mを測り、南桜古墳群のなかで最高位に位置する。

墳丘 古墳の位置する丘陵は南側が急峻な崖状地形をなしており、石室の南半部が崖面に含まれることから、本来の稜線の幅は現況よりさらに広いものであったとみて大過ないであろう。墳丘は大半が流失しており、判然としない。しかし、石室西側には等高線が円弧を描いてめぐる部分があり、それを残丘と考えると直径10m程度の円墳に復元することができる。

石室 南西方向に開口する横穴式石室である。玄室の奥壁側が遺存するのみであり、袖形状や羨道部については知りえない。また、左右側壁も1段分が遺存するだけであって、玄室の上部構造は不明である。

玄室の各部法量は奥壁幅約2.0m・右側壁長約3m以上・左側壁長約1.5m以上である。石室主軸はN-46°-Eを測る。

奥壁は扁平な大型石材1石を立て据えたもので、いわゆる「鏡石」に相当する。

右側壁は3石が残存する。奥壁側2石はヨコ使い、それに続く1石はタテ使いによって据えている。石材は長軸1.1～1.3m程度であり、8号墳に比して大きい。

左側壁は1石のみが残存する。長軸1.3m程度の石材をヨコ使いする。

小結 以上が9号墳の調査成果である。8号墳の場合と同様に遺存状況による制約はいかんともしがたく、十分に詳細を知り得ないのが残念である。そのなかでも、使用石材が8号墳に比べて格段に大型化している点はより新しい要素として評価しておくのが妥当であろう。所属時期については、おおむね6世紀末から7世紀初頭頃を想定しておきたい。

6. おわりに

先述したとおり、今回報告した3基の古墳はいずれも立地する丘陵斜面の一部あるいは大部分が崩落することによ

り墳丘や石室が滅失した可能性がある。このような丘陵崩落の背景には、当古墳群の立地する丘陵が風化しやすい花崗岩から形成されていることがある。全国的にみて中世段階に進んだ丘陵部の森林資源の減少が近世・近代においても進行し、山地の荒廃が進行したとされる。当該地域の丘陵も明治初期頃には著しく荒廃していたことが村絵図の記載等から知ることができる。古墳の遺存状況はまさにこうした丘陵(里山)の荒廃を反映したものであろう。

また、当該地域の丘陵中の谷筋では各所に多数の埋没しかけた石組砂防堰堤をみることもできた。こうした堰堤の営造に際しても周辺の石室石材が利用された可能性は否定できない。斜面の崩落や、それを防ぐための治山工事によって、おそらく多くの古墳が滅失したことであろう。

以上から、当該地域の丘陵は少なくとも近代以前のある段階までは古墳築造が十分可能な幅を有していたと考えられる。当然ながら、山様も現在とは大きく異なっていたのであろう。このように地滑り等の斜面崩落によって古墳が消失した可能性を否定し得ないとなると、現状での古墳分布が本来のものであったとは必ずしもいえなくなる。この点については十分留意が必要であろう。

さて、近代以降継続的に実施された治山工事等によって山地の荒廃は進行を抑制されているけれども、近年みられる異常とも思える気象は各地で地滑り等の多数の土砂災害等を引き起こしている。今後、今回報告した3基の古墳のような遺跡の破壊や消失が進行することが危惧される。文化財保護のためにも、早急な詳細分布調査と現況の記録化が必要であることをあらためて強調しておきたい。

(しげたつとむ)

註

- (1) 『野洲町内遺跡分布調査報告書』(野洲町文化財資料集1982-3)野洲町教育委員会、1983年。以下、本文中では本文は『分布調査報告書』と略す。
- (2) 以下の石室記述における玄室左右の側壁の呼び分けは奥壁から羨道方向をみて左右を示している。

編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

(編集担当)

平成21年(2009年)3月

紀 要 第22号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel.077-548-9780(代)
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>
E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)同朋舎